

ポレーシエ……チェルノブイリにおもいをよせて

チェルノブイリ救援・中部 事務局から 1990. 8. 31 NO. 3

8/21 救援物資500キロを携えてソ連へ出発！！

渡辺春夫さんと坂東弘美さん（「救援・中部」代表）

準備期間が短くて、救援物資の選定や関係各方面への協力のよびかけなど、十分ではありませんでしたが、とにかく、放射能測定器やファックス、使い捨て注射器、ビタミン剤、粉ミルクなど500キロを持って出発することができました。

出発の前日までソ連からビザの申請に必要な招待状がとどかず、向こうへ電報を打ったり電話をかけてもらったり、それでもらちがあかずソ連大使館へ直談判にいたりとはらハラしどうしてでした。

一方、荷物もあれこれ揃えてはみたものの、一体どれだけ、どういう方法で送ることができるのか、航空チケットの範囲内だと合わせて150キロぐらいたし、貨物便で送るとなると200キロで37万円もかかるし、（それよりもだれが荷造りするの??オロオロ*#\$%×）こまった、万事きゅうすか……あきらめない私たちは正しかつた！

外務省のご尽力やソ連大使館、アエロフロートのご協力で、私たちの用意した救援物資のほとんど500キロすべてが、幸運にも現地へ運べることになりました（終わり良ければすべてよし——そうはいかない。しっかり反省しなければならない。）。

< 第1回救援物資 >

放射能測定器 2台, ファックス 2台, 使い捨て注射器 (5ml 100本入り, 20ml 50本入り) **6000本**, 滅菌ガーゼ 78箱, 包帯 9

箱、ブドウ糖（粉末） 10K、パンクレアチン 5缶、リノックス（ビタミン剤） 2ケース、馬油少々、粉ミルク（8缶入り） 10ケース、スキムミルク（250g） 400箱、コーン缶（24缶入り） 5ケース、ミルキー 94袋、バルサン（検査用試薬）、書籍 5冊、文献、旗 4枚、ティーシャツ 少々

以上。

これらの物資を、ジトミール・ヴィースニク（新聞社）を受け入れの窓口
に、キエフの「チェルノブイリの子供達」の病院、ナロジチ地区病院、ジト
ミール病理学局、マリーンのゴルジェさん宛てと5か所へ28個のダンボー
ル箱に梱包しました。メッセージを添えて、それぞれのところへ訪問して手
渡すことになっています。

放射能測定器は新聞社とキエフの病院へ、ファックスは希望していたキエ
フの病院と今後の連絡のために新聞社へ持っていました。

しかし、行ってみないとわからないということもあって、実情に合わせて代
表2人の判断に委ねるということになりました。

ともかく、小さな体と心に重い荷物を背負って（渡辺さん、坂東さん2人
の弁）8月21日、盛大な見送りを後にソ連へ出発しました。

9月3日に帰国の予定ですが、出迎え、報告会、今後の救援活動の話し合
いなど事務局レベルでの準備に追われそうですので、皆さん多数のご参加、
ご協力を求めます。

<ソ連からのてがみ>

5月に私たちがソ連へ出した手紙の返事が、最初にくたウクライナのジト
ミールスキー・ヴィースニク以外にも8月に何通か届いています。その他ソ
連の有名な雑誌「アガニョーク」（30号 1990）の投書欄に私たちの
手紙が掲載された反響は大きく、次々といろいろな団体や個人から手紙が寄
せられています。げんざいあわせて11つうに達し、ロシア語のほか英文の
ものもあり、手分けして整理中です。それぞれ私たちの質問に答えた形式で、
「救援・中部」の代表を招待しますとも記されています。これらにどう対処
するか、帰国後の報告と合わせて検討しなければなりません。



Вчора в Житомир, в обласну організацію Спілки журналістів України прийшло делегація громадської Спілки «Чорнобиль» з Японії. В програмі перебування гостей з Японії — передача медичним закладам області медикаментів, інструменту, дитячих харчувань для налагодження, що постраждало від Чорнобильської аварії, вигачення стелю справа з лікарями, медікаментів, Радіація «Житомирського вісника» приготувала своїм гостям цікаві, насичені і корисні програму. Ласкаво просимо, Арузі з Японії!

НА ФОТО: члени Спілки «Чорнобиль» Харуо ВАТАНАБЕ і Хіроші БАНДО (аруки і третій зліва), власний кореспондент японського телебачення в СРСР Хіросі ТАКАСЕ (другий справа) і телеоператор Кодзі ЯМАУТІ (перший зліва), перекладач Хіросі ЙОШИДА (другий справа) і телеоператор Рад, 23 серпня 1990 року).

Фото С. ПЛАСУКА.

Yesterday the delegation of Society «Chornobyl» from Japan has arrived in Zhitomir, to the regional organization of Journalist Society of the Ukraine. They has presented medicaments, special apparatuses, eats for children. Their presents are addressed to the people of Zhitomir region. Our Japanese guests will make a study of the results of Chornobyl catastrophe, project a programme of help to the region. The newspaper «Zhitomirskyi Visnyk» has prepared an interesting and useful programme for the guests. Welcome, friends from Japan!

At photo: Kodji YAMAMUCHI, Haruo WATANABE, Hiroshi BANDO, Hiroshi TAKASE, Hiroshi YOSHIDA (Zhitomir, Soviets Square, August, 23, 1990).

Photo by S. GLAVCHUK.

現地からのFAX:

(ジトミールスキー・ゲイヌニーク紙 8月23日)

昨日、日本の「チェルノブイリの会」代表団がジトミールに到着し、ウクライナ・ジャーナリスト協会ジトミール支部を訪れた。彼らは医薬品や特殊機器、子供達の食糧等をもって来た。彼らの持参したものは、ジトミールの人々に贈られたものである。日本の客人たちはチェルノブイリの惨事でおこった事を調査し救援の計画を立てるだろう。ジトミールスキー・ゲイヌニーク紙は彼らのために興味ある有効なプログラムを用意している。

ようこそ、日本の友人達！

写真左から 山内こうじ(#)、渡辺春夫、坂東弘美、高瀬ひとし(#)、吉田ひろし(##)。

(#)日本電波ニュース、(##)通訳

ポレーシェチェルノブイリにおもいをよせて

チェルノブイリ救援・中部 事務局から 1990. 8. 31 NO. 3

8/21 救援物資500キロを携えてソ連へ出発！！

渡辺春夫さんと坂東弘美さん（「救援・中部」代表）

準備期間が短くて、救援物資の選定や関係各方面への協力のよびかけなど、十分ではありませんでしたが、とにかく、放射能測定器やファックス、使い捨て注射器、ビタミン剤、粉ミルクなど500キロを持って出発することができました。

出発の前日までソ連からビザの申請に必要な招待状がとどかず、向こうへ電報を打ったり電話をかけてもらったり、それでもらちがあかずソ連大使館へ直談判にいったりとハラハラしどうでした。

一方、荷物もあれこれ揃えてはみたものの、一体どれだけ、どういう方法で送ることができるのか、航空チケットの範囲内だと合わせて150キロぐらいだし、貨物便で送るとなると200キロで37万円もかかるし、（それよりもだれが荷造りするの??オロオロ*#\$%×）こまった、万事きゅうすか……あきらめない私たちは正しかつた！

外務省のご尽力やソ連大使館、アエロフロートのご協力で、私たちの用意した救援物資のほとんど500キロすべてが、幸運にも現地へ運べることになりました（終わり良ければすべてよし———そうはいかない。しっかり反省しなければならぬ。）。

< 第1回救援物資 >

放射能測定器 2台, ファックス 2台, 使い捨て注射器 (5ml 100本入り, 20ml 50本入り) **6000本**, 滅菌ガーゼ 78箱, 包帯9